



家に帰る退院の日のピースサイン

病状の変化と共に体力や食欲が落ち、日常生活の全般に介助が必要になってきたAさん。ある日、「家に帰りた」と打ち明けました。すぐに院内で検討し、家族の意向を確認すると迷ってしまいました。父親の思いを叶えたいが、がんを患った状態で帰っても、病状の悪化や何かあったときにどうすれば良いのか、家で大丈夫なのかという大きな不安を持っていたからです。

在宅療養を希望する場合、家族に迷惑をかけるから、病院が安心だから帰らない・帰れないという方も少なくありません。昔から病気を患えば入院というのが一般的で、家で看ることが想像しにくく、多くの家族が不安を抱きます。しかし、今は在宅療養をサポートするサービスが増え、家で療養生活を送る方も多くなってきました。

Aさんの家族も悩み、迷いましたが、訪問診療や在宅療養で利用できるサービスを受け、状況に応じて再入院もできるような手筈を整え、Aさ

田邑 昌子・文
函館おしま病院
ホスピス病棟看護師長



たむら しょうこ
根室市出身。北海道立釧路高等看護学院卒業。
平成18年函館おしま病院勤務。
平成24年緩和ケア認定看護師資格取得。
平成26年5月より同病院ホスピス病棟看護師長に就任、現在に至る。

んを家に迎える決心をしたのです。当時は眠っていることが多く、ぐったりとした様子で、声をかけることが憚られる時もありました。迎えた退院の日もただ頷くのみ。あれほど家に帰ることを望んでいたのに嬉しくはないのかと不安でした。退院記念にカメラを向けたその時、毛布がゴソゴソと動きました。暑くて手を出すのかなと見ていると、出たその手はしっかりとピースサイン。どこにそんな力があつたのかと思うほど何度も首を起こし、カメラに笑顔を向けたのです。一瞬にしてその場は笑いに包まれました。

それは、あのまま病室で過ごしたから、見られなかった姿かもしれませぬ。Aさんらしい優しさと茶目っ気を感じました。家族の絆や想い、勇氣と決断なくしては得られなかった時間。そして多くの人の支えで叶えられた願い。何より自分の想いを汲んで、なんとかしようとする家族が頑張ってくれていることが力となり、体現させたのです。「ありがとう」と。